

中東に残るユダヤ教

講師：志田雅宏（東京大学）

masahiroshida222@gmail.com

ユダヤ人のアイデンティティを形づくるもの

さまざまなユダヤ人、さまざまなユダヤ教、宗教的／世俗的のグラデーション

- ・ユダヤ人は世界各地に広がって生活してきた

ユダヤ人が形成し、営んできたユダヤ教も各地でさまざまに変容を遂げてきた

「ユダヤ教を実践しない」という選択肢も、ユダヤ人たちの「生き方」のひとつである

- ・現代ユダヤ人の世界分布（左下）¹

アメリカとイスラエルという**二大中心地**

いずれも各地からユダヤ人が移民してきた歴史を持つ＝異なる出自を持つ多様なユダヤ人の社会

- ・イスラエルにおける宗教の分布（2016年、右下図）²

イスラエル全体でユダヤ人は8割（残り2割のうち、多くはムスリム）

Haredi（超正統派）：8% *近年では10%以上とも

厳格に伝統的な教えを守る。ときにイスラエル社会や国家の政策と対立も（徴兵拒否など）

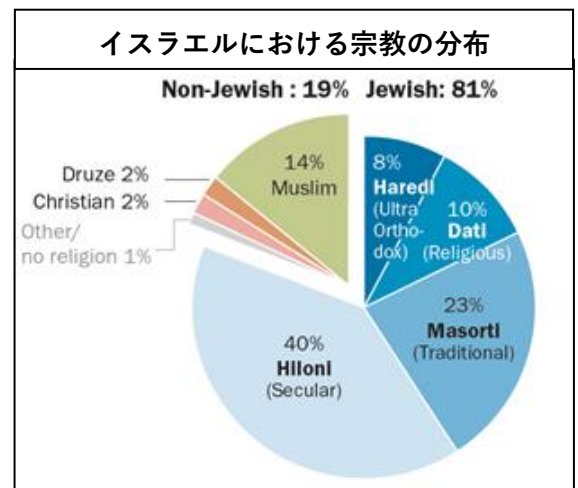
Dati（主に宗教シオニズム系および現代正統派）：10%

熱心にユダヤ教を実践する。イスラエル社会や国家を全面的に肯定し、その制度内で宗教を実践

Masorti（上記の2つに含まれないが、自分は「宗教的」とであると意識する人）：23%

Hiloni（世俗的ユダヤ人）：40%

⇒イスラエルのユダヤ人の半分は宗教から離れている



¹ 市川裕監修『pen BOOKS ユダヤとは何か。』阪急コミュニケーションズ、2012年、9頁。

² Pew Research Centerの調査による。<https://www.pewforum.org/2016/03/08/israels-religiously-divided-society/>（2022年4月24日最終アクセス）

ユダヤ人たち自身によるアイデンティティの創出と区分

- ・ユダヤ人は早くから自分たちをさまざまな仕方で区分してきた

それはキリスト教世界の「ユダヤ人」やイスラーム世界の「啓典の民」という概念よりも複雑である

古代末期：さまざまな宗派（セクト）の存在

- ・エノク派（前3世紀～）：聖書に登場するエノクの教えを継承すると信じる宗派
独自の終末思想と文学を持ち、周囲のユダヤ人たちから分離した
- ・ファリサイ派、サドカイ派、エッセネ派：ヨセフス『ユダヤ古代誌』に登場する三宗派
エルサレム神殿とのかかわり方の相違や社会的な階層により、複数の宗派に分かれた

中世：地域文化的なアイデンティティ

- ・ユダヤ民族の離散（ディアスポラ）にともない、各地で慣習や文化が独自に発展してゆく
⇒それにともない、地域ごとのアイデンティティ意識が強まる

例）中世西欧のユダヤ人たちの地域文化的概念

アシュケナズ（ドイツ・ライン地方）、ツアルファト（北フランス）

セファラド（イベリア半島）、プロヴィンツヤ（南仏プロヴァンスおよびラングドック地方）

現代：地域文化的概念の変化とユダヤ教諸派の成立により、きわめて多様化している

地域文化的概念の変化

- ・アシュケナズ系：12世紀以降の西欧での迫害・追放により徐々に拠点が東欧へ
東ヨーロッパ系ユダヤ人の総称となる⇒さらに現在ではヨーロッパ系ユダヤ人の総称に
- ・スファラディ系：1492年のスペイン追放により、オランダや地中海沿岸に移住
イベリア半島に「ルーツを持つ」ユダヤ人の総称：北アフリカ、バルカン地域、トルコのユダヤ人
- ・ミズラヒ系：「東」を意味する。中世までの「東」とはバビロニアのこと
イラクやイランなど、パレスチナ／イスラエルよりも東のイスラーム圏のユダヤ人の総称
＊西欧での「東のユダヤ人」（Ostjuden）：ロシアなどから移住してきた東欧ユダヤ人のこと

ユダヤ教諸派の成立

- ・改革派（Reform）：18世紀ドイツで成立⇒アメリカ合衆国の最大宗派。
近代的な理念を受け入れ、古い伝統を棄てる。礼拝改革（英語、男女同席）。女性ラビを認める
- ・正統派（Orthodox）：西欧で改革派と対立。イスラエルの最大宗派。
伝統的なユダヤ教文化を保持しつつ、現代社会に適応する（「伝統と近代化の統合」）
イスラエルの主席ラビは正統派が務める（アシュケナズ系とスファラディ系の二人制）
- ・超正統派（Ultra-Orthodox, Haredim）：東欧で成立。現在はアメリカ北東部とイスラエルに移住
伝統的なユダヤ教文化を厳格に守り、いくつものコミュニティに分かれている
イスラエルを世俗国家として認めない集団と、積極的に認めて社会運動や政治運動をする集団がある
- ・保守派（Conservative）：アメリカで20世紀初頭に成立。正統派と改革派の中間に位置する。
- ・再建派（Reconstructionist）：個人主義を掲げるアメリカの新しい宗派。1970年代に伸長。
- ・宗教シオニズム（Religious Zionism）：主にイスラエルでシオニズム運動を宗教的に解釈する宗派
イスラエルという国家を全面的に支持する。一部の過激派が入植活動を展開。

「スファラディ系ユダヤ人」(Sefardim) の創出

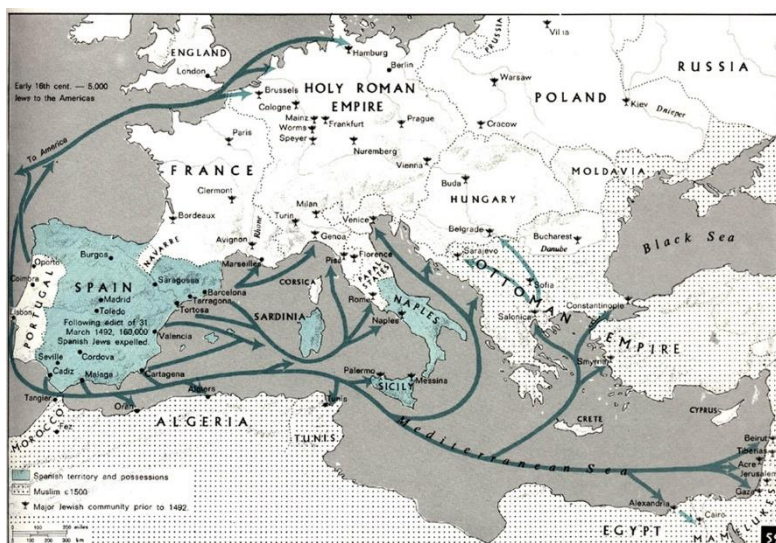
中世ユダヤ教世界における「スペイン」

- ・もとは聖書の表現：「セファラドの人々」(オバデヤ書 1:20)
リュディア王国(アナトリア地方)の捕囚民のことか(右図³)
＊リュディア語で「リュディア」を Sfarad と呼称する
- ・中世にイベリア半島に移住したユダヤ人たちが、「スペイン」を Sepharad として同定した。
＊ちなみに「アシュケナズ」も聖書に由来する：ノアの子孫に登場する名前(創世記 10:3)⁴
中世初期にはバビロニアとパレスチナにふたつの法的権威(ガオン)が存在し、対立関係にあった
⇒イベリア半島のユダヤ人たちはバビロニアの権威を継承する者たちとして自己同定した
他方、ドイツ・ライン地方のユダヤ人はパレスチナの権威の継承者であるとして、彼らと区別した



スペイン追放(1492年)後

- ・レコンキスタ完成後のユダヤ人追放令
当時国内で増加していた元ユダヤ教徒のキリスト教改宗者(コンベルソ)が、隠れてユダヤ教を実践しているという社会的嫌悪が問題に⇒改宗者を守るために国王がユダヤ教徒を国外へ追放
- ・「追放」(Gerush)という巨大な「災い」として記憶される
スペインから各地へ移住したユダヤ人が、自分たちのルーツと文化、災いの記憶を共有しようとするなかで、「スファラディ系ユダヤ人」としての自己意識が強まる⁵
スファラディ系の祈祷書やラディーノ語(ユダヤ・スペイン語)の言語文化を維持する



音楽家の岡庭矢宵さん
『セファルディ・ユダヤ 魂を紡ぐ歌』

³ <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/b7/Lyidian-empire-600BCE.png> (最終アクセス：2022年5月15日)。オバデヤ書はバビロン捕囚期(前6世紀)の作と考えられているが、リュディア王国へのイスラエルの民の移住は、捕囚後のペルシア時であるため、1:20を含む部分は後代(前3-4世紀?)の加筆と考えられる。原口尚彰「初期ユダヤ教におけるディアスポラ」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第28号(2010年)、19-42頁；木田献一(監修)『新共同訳旧約聖書略解』日本基督教団出版局、2001年、987-989頁。

⁴ ノアの子ヤフェトの子ゴメルに三人の息子がおり、一番目がアシュケナズ、三番目がトガルマである。当初はトガルマが「ゲルマニア」と同定されたが、その後トガルマではなくアシュケナズの方が同定されるという複雑な(?)経緯がある。A. Berlin ed., *The Oxford Encyclopedia of the Jewish Religion, Second Edition*, Oxford: Oxford University Press, 2011, p. 76.

⁵ Franklin H. Little, *The MacMillan Atlas History of Christianity*, London: MacMillan, 1976, p. 53.

現代イスラエルにおける宗教行政制度としての「スファラディ系」

- ・主席ラビ（Chief Rabbi）制度
地域や国家のユダヤ人共同体の宗教的な最高権威を持つラビを選出する制度
中世西欧やオスマン帝国で確立され、現代でも続く（＊アメリカ合衆国にはない）
- ・パレスチナではオスマン帝国統治時代にエルサレムに設置（イスタンブールの「ハハム・バシ」が頂点）
その後、1920 年（イギリス委任統治時代）にアシュケナズィ系の主席ラビも認められた
（18～19 世紀に、東欧からの宗教的なユダヤ人の移住やシオニズム運動による移住が増加したため）
- ・1948 年のイスラエル建国後は「ふたりの主席ラビ」として制度化
アシュケナズィ系とスファラディ系のそれぞれの主席ラビが宗教行政の権威となる
いずれも正統派のラビが務めるため、正統派以外のユダヤ教が「ユダヤ教」として認められない事例も
⇒特に改革派や保守派などアメリカの主要宗派がしばしば衝突する
- ・ヨーロッパ以外の地域の出身地のユダヤ人は、すべてスファラディ系の主席ラビの統括に入る
出生や冠婚葬祭にかんするユダヤ法規（ハラハー）の指導は、原則としてスファラディ系にもとづく
⇒これに反発し、独自の伝統を持つエチオピア系やイエメン系ユダヤ人が文化闘争を起こす事例も
（スファラディ系主席ラビの管轄に入るが、文化的独自性をアピールする運動を続ける）

イスラエルでは宗教行政の観点から、ふたつのユダヤ教伝統に区分されてしまう
特に「スファラディ系」の括りが広すぎるため、中東のユダヤ教伝統の多様性が単純化される

イスラエルにおけるアシュケナズィ系中心の社会構造

アシュケナズィ系ユダヤ人の覇権

- ・「アシュケナズィ系」「非アシュケナズィ系」という二項対立の図式が成立

アシュケナズィ系ユダヤ人の覇権の要因

- ①ユダヤ民族全体に占める最大多数であること
中世後期にドイツから東欧に移住したことで一気に人口が増加（現在ではユダヤ民族全体の 6 割）
- ②アメリカへの移住（19 世紀末～20 世紀初め）：200 万人の東欧ユダヤ人が移住し、一大拠点に
- ③ショアー（ホロコースト）とイスラエルの建国（1948 年）
シオニズム運動下での移住（アリヤー、19 世紀末～1930 年代）は東欧からであった
ナチスによる虐殺の生存者たちの安住の地という建国神話も要因となった

- ・「白人」中心化するイスラエルのユダヤ人社会
政治的・経済的な覇権を握るアシュケナズィ系に対して、その他のユダヤ人が不可視的になる⁶

あるエチオピア出身ユダヤ人のイスラエル移住のさいの会話

ケスがイスラエル人のガイドに尋ねた。「エルサレムにはこんなにアルビノのユダヤ人が多いのか？」
「と言いますと……白人ということ？」
「そうだ、白人、つまり、白いということだが……」
「ですが、イスラエルでは、ユダヤ人はみんな白人ですよ」（映画『約束の旅路』より）⁷

⁶ 白杵陽『イスラエル』岩波新書、2009 年、13－20 頁。

⁷ R・ミレイアニユ、A・デュグラン（小梁吉章訳）『約束の旅路』集英社文庫、2007 年、38 頁。

中東に残るユダヤ教を概観することの意義とは？：宗教学的な関心

- ・アシュケナズ系ユダヤ人の覇権は政治や社会、経済の視点で論じられるべき論点を持つ
それに対し、本講義では「宗教」に関心を向け、中東のユダヤ教の生活や文化、現代的問題を見てゆく
- ・イスラエルも中東の国家ではあるが、本講義では上記のような現代の二項対立により、「非アシュケナズ系」として一括りにされてしまうユダヤ教の多様性を掘り起こし、紹介したい
(ゆえに、イスラエルでのアシュケナズ系の宗教世界(特に「超正統派」の生活や社会)は対象外)
- ・中東には、中世以来ユダヤ教の主流をなしてきたラビ・ユダヤ教(Rabbinic Judaism)のなかのさまざまな潮流だけでなく、ラビ・ユダヤ教とは大きく異なるユダヤ教も存在する

中東に残るユダヤ教は、ユダヤ教(Judaism)を複数形(Judaisms)でとらえる視点をもたらす

事例)「セデル」に見る文化的な多様性

過ぎ越しの祭り(ペサハ)

- ・聖書の出エジプトの奇跡を記念する祝祭：春の収穫祭が聖書の物語と結びついたもの
「除酵祭」とも呼ばれ、すべての酵母を取り除くことが神によって命じられる(出エジプト記 12 章)
エルサレム神殿への巡礼祭としても知られ(イエスの「最後の晩餐」)、現在も宗教的／世俗的を問わず、多くのユダヤ人が実践する祭りである。イスラエルでは七日間、その他の国では八日間続く。

セデル：過ぎ越しの祭りの初日の儀礼

- ・夕食時に特別な皿を用意し、食材を並べる(右写真)

マロール(苦いハーブ)：エジプトでの苦役
ズロア(羊の前脚)：過ぎ越しにおける供儀
ハロセット(クルミやレーズン)：ユダヤ人が造らされていた煉瓦
ハツェレット(ロメインレタスの根)：苦役
カルパス(パセリ *ポテトの家も)：エジプトでの初期の繁栄
ベイツァ(ゆで卵)：神殿崩壊の哀悼



- ・セデルの前に家を徹底的に掃除して酵母を掃き清める
祭りの期間中はマツァ(種無しパン)を食べる：
セデルではマツァを半分に割り、大きな方(アフィコマン)を家のなかに隠す
(→食後に子供たちがそれを探す)
- ・セデルの最初にキドゥーシュ(ワインの祝福)を唱え、手を洗う
- ・「ハガダー」の朗読：セデルの中心をなす



冒頭の祈り：「今年は奴隷の身だが、来年は自由の身となっているであろう」

祭りの意味を問う親子の問答、ラビたちの聖書講釈、四人の息子たちによる質問、詩編の朗唱
締めくくりの祈り：「来年こそはエルサレムで！」

- ・食事：酵母入りの食材はいっさい使わない
マツァ団子を入れたスープ、サラダ、ゲフィルテ・フィッシュ(つみれ)、七面鳥など
*豆類や米を食べる地域もある

さまざまなセデル：聖書解釈と風習⁸

・アフガニスタン&イランのユダヤ人

「ダイエヌ」の祈りを唱えるさいに長ネギで優しく相互に打ち合う⁹
(イスラエルの民がエジプトの奴隷主人から受けた苦役を象徴)

・エチオピアのユダヤ人

祭りの準備として土製の食器を壊し、新しい食器を用意する

(祭りの期間中に普段とは異なる専用の食器を用意するのは広くみられるが、壊すのは珍しい)

・コーチン(インド)のユダヤ人

自宅内に祭りの期間中の食器・器具類を保管しておくための一部屋を設ける

(普段用の食器・器具類との接触を遮断する。エチオピアのユダヤ人よりもさらに厳格といえる)

・ラテン地中海(ギリシアなど)のユダヤ人

ハロセット(「煉瓦」の象徴)を食べ物ではなく、本当に煉瓦で造って皿として使う

・モロッコのユダヤ人

セデルの夕食として羊の頭を食べる：聖書時代のイスラエルの民が実践していたとされる供犠

・イエメンのユダヤ人

救世主(メシア)が到来することを期待して、セデルのあいだは家の扉を開けておく

・チュニジア&リビアのユダヤ人

「異邦の者」が入ってきて、セデルによって得られた祝福を持ち逃げされないよう扉を閉める

・カライ派のユダヤ人 *中世にラビ・ユダヤ教と対立して形成された宗派

ラビ・ユダヤ教以上に酵母の排除に厳格。食材だけでなくワインも禁止

→そのため、セデルにおこなうワインの祝福(キドゥーシュ)もぶどうジュースで代用する

ラビたちの聖書釈義を読まないで、カライ派の「ハガダー」はかなり短い



過ぎ越しの祭りの由来となっている聖書の出エジプトの物語や、それに関連する聖書の戒律について、地域ごとに解釈の相違があり、それが多様な風習につながっている

⁸ 以下を参照。Aaron J.H. Tapper, *Judaisms: A Twenty-First-Century Introduction to Jews and Jewish Identities*, California: University of California Press, 2016, pp. 23–25; Daniel J. Lasker, *Karaism: An Introduction to the Oldest Surviving Alternative Judaism*, London: The Littman Library of Jewish Civilizations, 2022, pp. 107–108.

⁹ <https://jewishjournal.com/commentary/columnist/334681/why-do-persian-jews-beat-each-other-with-scallions-during-the-passover-seder/> (2022年4月24日最終アクセス) 写真はロサンゼルス系のイラン系ユダヤ人コミュニティにおけるセデルの様子。アメリカ西海岸にはイラン系やカライ派など、中東出身のユダヤ人のコミュニティがいくつか存在する。

【歴史】トルコ：シャブタイ派運動、『シュルハン・アルーフ』、ラディーノ文化

シャブタイ派運動：近代の新しいカバラーの展開

シャブタイ・ツヴィ（1626–1676）のメシア運動とその挫折

- ・トルコ西部スミルナ（現イズミール）生まれ
伝統的なユダヤ教の教育に加えて、『ゾーハル』（13世紀）などのカバラー文学を読む
- ・優れた賢者であった一方、しばしば「精神的な異常」をきたすことも
神の名前（聖四文字）を唱える、トーラーの巻物との結婚式を挙げるなどの問題行為
- ・スミルナを追放され、放浪⇒パレスチナに優れた神秘家がいると聞いて訪問
ガザのナタン（1643–1680）：靈魂転生論にもとづき、シャブタイの靈魂の「源泉」を突き止める
⇒シャブタイの靈魂はメシアの靈魂が転生したものである！
- ・1665年以降、ナタンによるシャブタイ＝メシア待望論の流布が始まる
シャブタイがメシアとしてスミルナへ帰還：メシアによる救済が近いと宣言する
- ・反規範的指導：スミルナでのラビの任命に介入、戒律で禁止されている食物を食べる
神殿崩壊を嘆くアヴ月9日の断食日を、シャブタイの誕生日としての祝福の日に変更する
- ・オスマン帝国のスルタンから王位を奪おうとして宮廷に単身で乗り込む
しかし、もちろん捕らえられ、宮廷で「イスラームへの改宗か、死罪か」を迫られる
シャブタイ・ツヴィは殉教ではなく改宗を選択。みずからその場でターバンを巻いてムスリムに！

シャブタイ・ツヴィの運動を意味づけるカバラーの物語

- ・ナタンはルリア派のカバラーにもとづいてシャブタイの運動と棄教を説明する

イツハク・ルリア（1534–1572）のカバラー

- ・ユニークな創造論：神の自己収縮から光の流出へ
世界の創造は無限である神が自己収縮（ツィムツーム）することによって実現された
創造の過程で神の光が世界に流れ込み、散らばっていった
 - ・「修復」（ティクーン）：人間の宗教的実践の隠された目的
世界中に散らばる神の光を集めて、世界の調和を取り戻すのはユダヤ人の使命
ユダヤ人の宗教儀礼によってその「修復」が実現する
戒律は本来人間のためであるが、ルリアのカバラーでは、神の幸福のためでもある！
 - ・「密着」（ドゥヴェクト）：神との一体化
戒律やハラハーの実践を通じて神の世界の「修復」に加わったユダヤ教徒の魂は神と一体化する
- ・ナタンは民衆に対して、メシアであるシャブタイのための「修復」の祈りを実践せよと説く
⇒もともと一部の知的エリートの思想であったカバラーが民衆のあいだに浸透する
 - ・ナタンは「棄教したシャブタイは偽者のメシアなのか？」という問題への答えを用意する
メシアの靈魂はこの世界にもたらされた悪に染まりながら、その悪と戦うという使命を持つ
（*シャブタイを聖書に登場する義人ヨブになぞらえる）

シャブタイはイスラームへの改宗（悪に染まること）によって、世界の「修復」に身を捧げた
→彼に宿るメシアの靈魂は転生し、次に生まれてくるメシアに「修復」の義務が引き継がれる
民衆もまた、ユダヤ教の宗教実践によってこの「修復」のプロセスに参加する

シャブタイ派運動のさまざまな影響：ユダヤ教の枠組みを大きく超えて

- ・ **ドンメー教団**：シャブタイ・ツヴィの後を追ってイスラームに改宗した信奉者たち
トルコのムスリムから「ドンメレール」（改宗者）と蔑称されるが、独自の宗教儀礼を保持し、サロニカで勢力を拡大。ラビ・ユダヤ教からも独立するが、独自に『ゾーハル』の学習を続ける
19世紀以降、教団の末裔がサロニカでオスマン帝国の近代化、青年トルコ人革命（1908年）に貢献
トルコ共和国初代大統領ケマル・アタテュルクはドンメー教団が設立した学校の出身
- ・ **隠れシャブタイ派**：イスラームに改宗せず、ユダヤ教のカバラー神秘家としてシャブタイを信奉
シャブタイへのメシア信仰はラビ・ユダヤ教では異端視されていたので、その信仰を隠しながら共同体の指導的地位にて活動：ヨナタン・アイベシュツツやモシェ・ハイム・ルツツアット
隠れシャブタイ派への「異端審問」：著作や護符にシャブタイ派を示す暗号が隠されていないかを調査
- ・ **フランク派**：ポーランドでヤアコヴ・フランク（1729–1791）がシャブタイ派信徒を集め、カトリックに集団改宗。厳格なラビ・ユダヤ教から解放された新しいユダヤ教の創造を掲げ、『ゾーハル』やシャブタイ派思想に依拠しつつ、キリスト教を信奉するユダヤ人共同体の形成をめざす

法典『シュルハン・アルーフ』：現代のユダヤ教の法的基盤

ヨセフ・カロ（1488–1575）

- ・ トレド生→まもなくしてスペイン追放（1492年）により家族でポルトガル→トルコへ
イスタンブル、エディルネ、ニコポリ、サロニカと移住するなかでさまざまな指導者に支持
- ・ 1536年（48歳）でパレスチナ北部の都市ツファットに移住：ユダヤ法廷の長を務め、共同体を指導
稀代の法学者として、また敬虔さと禁欲的生活に励む神秘家として生活する

『シュルハン・アルーフ』の完成（1563年）

- ・ 34歳から20年かけて完成させた大法典『ペイト・ヨセフ』の縮約版
タルムードに依拠した百科事典的な大法典を実践的な法典として機能させるために縮約したもの
- ・ **『シュルハン・アルーフ』は、現代のユダヤ教世界で最も広く読まれるハラハー（ユダヤ法規）の文献**
実践的な指南書としてだけでなく、緻密な学習の対象に
現代の法的書簡（レスポンサ）や生活指南書（*Sha'alei Halakhah* など）で最も頻繁に参照される
1864年の標準版には15もの註解が併記され、各項目が学習される

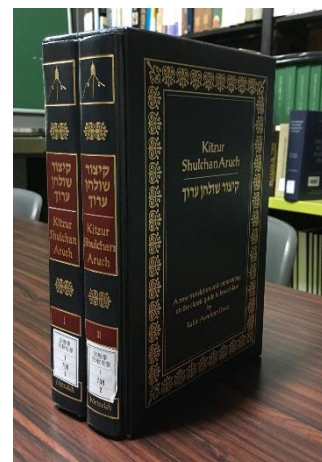
『シュルハン・アルーフ』の構成

- ①「オーラハ・ハイム」：日々の戒律、安息日や祝祭
- ②「ヨーレー・デアー」：食事規定、清浄規定、服喪など
- ③「エヴェン・ハエゼル」：結婚や離婚
- ④「ホシェン・ミシュパト」：刑法、社会生活にかんするルール

* 現代の標準的な版のひとつである『キツール・シュルハン・アルーフ』（右写真）

『シュルハン・アルーフ』の要点を（さらに）縮約したもの

（東京大学文学部宗教学研究室所蔵、報告者撮影）



現代トルコのラディーノ文化

トルコ共和国における「市民」としてのユダヤ人

- ・オスマン帝国時代のスファラディ系ユダヤ教文化の隆盛
オスマン帝国時代のミッレト制では、ユダヤ人の共同体が自治を認められていた
- ・スペインを追放されたスファラディ系ユダヤ人の宗教文化の中心地に
ラディーノ語（ユダヤ・スペイン語）の文化：生活言語であり、かつ伝統の遺産としての言語
多分野へのユダヤ人の進出：政府高官（ドナ・グラシア・ナシとドン・ヨセフ・ナシ）、商人、神秘家
- ・ローザンヌ条約（1923 年）の翌年、スルタン制が廃止され、トルコ共和国が樹立
共和国樹立につながった青年トルコ人革命に、シャブタイ派の流れをくむドンメー教団が深く影響
- ・帝国時代の制度であったミッレト制が廃止され、ユダヤ人もトルコ国民としてムスリムと平等に：
他方、アラビア語を公用語とするため、学校でのヘブライ語教育が禁止され、アラビア語同様ラディーノ語も（ヘブライ文字ではなく）ラテン文字で表記されるようになるなどの変化も

イスラエルとの友好的な関係性（1949 年に早くも国交樹立）

- ・トルコ（特にイスタンブール）ではシオニズムはほとんど支持されず
また、反セム主義的表現に対する法規制がかなり厳格
ユダヤ人のイスラエル移住はトルコ経済を弱体化させようとする共産主義者の思惑であるという言説も流布し、「シオニズム＝イスラームにとっての危機」という論調が形成される
- ・1948 年の建国当初から 60 年代までは移住者も多かったが、その後は減少。
イスラエルのアシュケナズ系中心の社会や経済に不満を持ち、トルコに戻るユダヤ人も

世俗化の進行と 1980 年代以降の「伝統回帰現象」

- ・1948 年以降はユダヤ系学校の設置が許可され、日曜学校（Mahazikei Torah）やラビ養成学校も創設されたが、世俗化が進展し、ユダヤ人たちの宗教離れが進む。また、ラディーノ話者も著しく減少。
- ・1984 年のイスタンブールのシナゴグ襲撃事件のさいに、トルコの首相が主席ラビに弔意と共感を表明
シナゴグがトルコの法による保護施設（vakif）となる
- ・**1980 年代以降は、若者世代を中心に伝統回帰の傾向がみられ**、週刊誌『シャローム』が復刊される
ラディーノ語を学ぶ若者が増え、スファラディ系ユダヤ文化の伝統に自身のアイデンティティを見出そうとする「ユダヤ探し」が広がる

1970～80 年代の伝統回帰現象：ユダヤ教にかぎらず世界的にみられた宗教現象

イスラエルではテシュヴァ運動：世俗的なユダヤ人の若者がユダヤ教超正統派に入信

アメリカではハヴラー運動：自分だけの「ユダヤ教」を創る Do-It-Yourself の個人主義的運動

スファラディ系ユダヤ音楽の伝統

- ・シナゴグでの礼拝時に典礼詩（ピユート）をメロディに乗せて歌う伝統（16 世紀～）
- ・Maftirim：トルコの古典音楽を取り入れたラディーノ語やヘブライ語の歌唱を実践する協会
イツハク・E・ナヴォンの歌集 Yinnon：<https://jewish-music.huji.ac.il/content/yinon>
宗教音楽の CD（試聴可）：<https://jewish-music.huji.ac.il/content/ottoman-hebrew-sacred-songs>
（＊ウェブサイトはいずれもヘブライ大学ユダヤ音楽研究所のもの）
- ・イズミルの La Dansa：音楽活動による慈善団体
貧しい新婚の夫婦を楽しませるための歌唱と舞踊などを実践する

【伝統】 イエメン、エチオピア、カライ派：ラビ・ユダヤ教とは異なる独自の伝統

イエメンのユダヤ人

きわめて独自性の高いユダヤ教文化の伝統

- ・3世紀頃のヒムヤル王国出身のユダヤ人たちの墓碑がパレスチナ北部で発見されている
→イエメンでの定住は2世紀後半か（しかもすでにパレスチナへの移住も？）

イエメンのユダヤ伝承では、バビロン捕囚（前6世紀）が起こる前に、預言者エレミヤによるユダ王国滅亡の予告を信じたエルサレムのユダヤ人がイエメンに移住したのが始まりとされる。捕囚が終わった後もユダ地方に戻ることを拒絶した彼らがイエメンで伝統を築いていったと語られる

- ・ヒムヤル王国（前2世紀～後6世紀）：イスラーム化以前のイエメンの王国

380年頃、アブーカリブ王がユダヤ教を王国の公式の宗教として採用する

バビロニアのラビ・ユダヤ教とは異なる独自の中心地が形成される（イスラーム以前）

- ・12～15世紀の経済的・文化的な繁栄
地中海貿易の拡大にともない、港湾都市アデンの経済的重要性が高まり、多くのユダヤ商人が活動

イエメン・ユダヤ教文化の黄金期

①特徴的なヘブライ語発音と聖書朗読：標準的なティベリア方式とは大きく異なる

- ・トーラーの巻物もティベリア方式ではないため、文字の綴りや記号などが標準的な巻物と異なる
- ・聖書朗読ではヘブライ語原典だけでなく、アラム語訳（タルグム）も朗読する
（＊ラビ・ユダヤ教の教典ミシュナでそう定められているが、守っているのはイエメン系だけ）
- ・祈祷のリズムもかなり厳格に守られる（⇨他の中東の礼拝では、リズムは自由に変化）

②哲学や天文学の発展

- ・マイモニデスの哲学書『迷える者の導き』の註解、正確な暦の画定のための天文学など

③メシア運動

- ・ムハンマドの登場（7世紀）がイエメンのユダヤ人たちのメシア待望を刺激した？
- ・シーア派のメシア思想と相互に影響をおよぼすなかで拡大
⇨マイモニデス『イエメンの書簡』：メシア運動のような虚構の運動に従事することを批判
- ・17世紀のシャブタイ派運動の影響も広がり、イエメンでもメシア運動が展開された

16世紀以降の苦難の歴史

- ・ザイド派（シーア派の一派）の進出：ユダヤ人に対する不寛容な政策
イマームのアル・ムタワッキル・イスマーイール（17世紀）：イエメンからユダヤ人を根絶する試み
シャブタイ派運動の波及によるメシア待望の高まりを懸念したか
- ・恒常的な社会闘争？：比較的寛容であったイスラーム世界のユダヤ人社会のなかでは特異な現象か
三階以上の家屋の建造禁止、淡色の衣服の着用義務、ムスリムの左側しか歩いてはいけない、など都市部ではさまざまな制限が課される
また、農業への従事が禁止される⇨貧困や食糧難に苦しむユダヤ人がほとんど

大規模なイスラエル移住（アリヤー）

- ・地理的な近さもあり、中世にも断続的に移住：パレスチナにイエメン系ユダヤ人の共同体が存続
- ・シオニズムと移住はイマーム・ヤフヤに弾圧されていたが、彼の死後は移住が許可される（1881年～）
→財産をすべて手放すことを条件に、1949～51年だけで5万人がイスラエルへ移住

「東のユダヤ人」(ミズラヒーム)あるいはイエメンのユダヤ人として

- ・建国以前のパレスチナでは、イエメン系ユダヤ人は「スファラディ系」に組み込まれる
しかし、出身地ごとに形成される共同体への義援金(ハルカー)はほとんど分配されず
(※「ハルカー」とはパレスチナに移住したユダヤ人たちを経済的に支えるために、離散の地のユダヤ人たちが寄贈する義援金のこと。)
- また、エルサレムには居住スペースがなく、イエメン系ユダヤ人は路上生活を余儀なくされた
→アラブ人が排斥された農村に労働力として入植するイエメン系も多かった
- ・イエメン系ユダヤ人救済のための組織
西欧のユダヤ啓蒙主義の知識人イスラエル・D・フルムキンによる支援協会の設立
プロテスタントの宣教師たちによるイエメン系への宣教活動への反対
義援金の確保、イエメン系ユダヤ人の生活拠点としてのシルワーン村の選定
(※アラブ人が居住する東エルサレムに位置する村。現在は過激派のユダヤ人入植者の活動が問題化)

イスラエル建国後もイエメン系は「スファラディ系」に属しているが、**移住後の生活水準の向上のための運動や、スファラディ系文化とは異なる独自の伝統を守るための活動が展開されてきた歴史がある**

- ・イエメン系ユダヤ文化の最も活動的な側面は音楽や舞踊
女性歌手：ブラハー・ゼフィラ https://www.nli.org.il/en/items/NNL_MUSIC_AL003457718/NLI
ショシャナ・ダマリ https://www.nli.org.il/en/items/NNL_MUSIC_AL990032581710205171/NLI
(※いずれもイスラエル国立図書館所蔵の音源。試聴可)
- 舞踊：サラ・レヴィ・タナイによる Inbal Dance Theater の創設(1949年) <https://www.inbal.org.il/>

エチオピアのユダヤ人

「ベタ・イスラエル」(「ファラシャ」)

- ・聖書を中心とするユダヤ教の信仰者たちを起源として主張する人々：「ベタ・イスラエル」を自称
「ファラシャ」(ゲエズ語で「異邦人」とも呼ばれる)
- ・**ラビたちのタルムードに依拠しない独自の聖書解釈の伝統**
旧約聖書外典に位置づけられるベン・シラの書やユディト書も正典として位置づけている
- ・1-6世紀の幅広い期間において、ユダヤ教を受容した人々が断続的にエチオピアに移住してきたか
→6世紀の皇帝カレブがアラブ系ユダヤ教指導者ユスフ・ドゥ・ヌーに対して進軍した
この頃までにはアクスム王国内にユダヤ人の共同体があったと推察されている
- ・中世にはベタ・イスラエルの王国があったというような伝承も(※実際には地方領主か)

修道院制度の導入

- ・15世紀にキリスト教徒のエチオピア皇帝の圧力を受け、修道院制度を導入する
アッバ・サブラヤセガ・アムラクといったベタ・イスラエルの「修道僧」が登場
独自の礼拝や厳格な清浄規定の実践などを特徴とする修道僧たちが、ユダヤ民衆の尊敬を集める
ベタ・イスラエルの「聖人」たちのほとんどは、こうした修道僧であった
- ・19世紀にプロテスタントの宣教師たちがエチオピアで活動：ベタ・イスラエルも布教対象に
宣教師たちにより、ベタ・イスラエルの修道制が非難され、彼らとの宗教論争でも劣勢となったため
に、修道制は著しく衰退していく

ラビ・ユダヤ教の教化

- ・20世紀初めにおけるラビ・ユダヤ教の教化

西欧からヨセフ・ハレヴィやジャック・フェトロヴィッチらがベタ・イスラエルを訪問

彼らによってラビ・ユダヤ教の教育がおこなわれる

また、西欧に留学する者たちも現れ、ベタ・イスラエル内の知的エリートが誕生する

- ・国内のアムハラ州とティグレ（北部）の共同体が対立、深刻な飢饉、1935年のイタリア軍侵攻などにより、ベタ・イスラエルは苦境に立たされる

「ユダヤ人」としての認定とイスラエル移住

- ・16世紀のラビ・ダヴィド・イブン・ズィムラが、ベタ・イスラエルを「ユダヤ人」として認定

彼らの実践するユダヤ教は独自の聖書伝統によるものであり、タルムードを中心とするラビ・ユダヤ教とは大きく異なるが、彼らは聖書時代のイスラエル十二部族のひとつ、ダン族の子孫である
彼らには優れた学者がおらず、偶像崇拜者たち（キリスト教徒）に囚われた子供たちのようなもの

- ・パレスチナ／イスラエルの主席ラビたち（ラヴ・クック、オヴァディヤ・ヨセフ）

ベタ・イスラエルはユダヤ人であり、彼らをイスラエルに連れてくることは同胞としての義務である

- ・1975年にエチオピアのユダヤ人に「帰還法」が適用される

イスラエルに移住することを法的に認め、また移住者たちに市民権を付与する

- ・ただし、Hidush ha-Yahadut（ユダヤ教の刷新）という浸水儀礼を受けなければならない

⇒主席ラビが定めるユダヤ教への改宗儀礼ではないが、エチオピアのユダヤ教を正当なものとして認めていないような措置。それゆえ、ベタ・イスラエルの宗教伝統への侮辱と感じる者も

- ・エチオピア内戦からユダヤ人を救出する作戦（モーセ作戦、ソロモン作戦など）により、1980～90年代に4万人もの移住者。現在ではイスラエルに5万人のエチオピア系ユダヤ人が暮らす

シグド（Sigd）：エチオピア・ユダヤ教の祝日

- ・大贖罪日（ユダヤ新年から10日後）の50日後に祝われるエチオピア・ユダヤ教独自の祝日
「シグド」とはゲエズ語で「平伏」の意

- ・ベタ・イスラエルでは神がモーセに初めて現れた日であると信じられている

- ・この日には断食をおこない、モーセ五書とヨシュア記、士師記、ルツ記を朗読する
また、詩編を朗唱し、神殿の再建を願う祈りを唱える

- ・2008年にイスラエルの祝日として認定される

⇒エチオピア・ユダヤ教の慣習と伝統を社会に向けてアピールする機会として重視されている¹⁰



¹⁰ 写真はハアレツ紙（2015年11月12日付）より。<https://www.haaretz.com/jewish/in-photos-ethiopian-israelis-celebrate-sigd-1.5420930>（2022年5月19日最終アクセス）

カライ派 (Karaites)

中世においてラビ・ユダヤ教と対立したもうひとつのユダヤ教

- ・ダニエル・アル・クミスイらペルシア出身のユダヤ人たちにより創設 (9 世紀)

ラビたちの教典タルムードは彼らが創出した教えにすぎないとして拒絶

- ・ヘブライ語聖書のみを唯一の教典とし、ラビ・ユダヤ教と徹底的に対立する

仮庵の祭り (10 月頃) のときに、ラビたちがエルサレムのオリーブ山でカライ派に破門宣告することが年間行事となっていたとの報告も (12 世紀)

パレスチナでの禁欲主義的な宗教生活：「アヴェレイ・ツィオン」(シオンの服喪者たち)

- ・聖地への移住と聖書の規定に厳格な宗教実践がメシアによるユダヤ民族の救済をもたらすと信じる
- ・禁欲的な生活：肉を食べることを避け、粗末な服を着て、昼も夜もメシア到来のために祈る
＝エルサレムという聖地を、救済の祈りが直接的に神のもとへ届けられる場所と考える

- ・きわめて緻密な聖書学習：ヘブライ語文法書や聖書註解の形成
- ・ヤアコヴ・アル・キルキサーニとサアディア・ガオンの論争
イスラーム思弁神学 (カラム) を取り入れた合理的な信仰の探究
ラビたちもカライ派と論争を繰り返すことで、学知を高めていった

東欧への移住

- ・十字軍の侵攻によるパレスチナの荒廃にともない、12 世紀以降はビザンツ帝国へ移住

バシュヤトヒ家によるラビたちとの交流とカライ派改革

- ①カライ派：安息日には一切火を使ってはいけない

ラビたち：点灯が安息日前であれば問題なし

⇒バシュヤトヒ家は、安息日に家のなかを火で照らすことを許可

- ②カライ派：新月は目視でなければならず、エルサレムの法廷が目視の証言者によって新月を宣言

ラビたち：新月は計算によって算出

⇒バシュヤトヒ家は、天文学による暦計算を導入 (エルサレムが遠くなったせい)

- ・16 世紀以降は東ヨーロッパへ移住：クリミア半島に定住する (ラビ・ユダヤ教のユダヤ人たちも)
リトアニアにも拠点が形成される：ラビ・ユダヤ教とキリスト教をよく学ぶ
- ・16 世紀のカライ派のキリスト教論駁書が、ユダヤ人たちのあいだでベストセラーに
(＊17 世紀にラテン語訳され、ヴォルテールやライマールスらも読む)
- ・18 世紀にはラビ・ユダヤ教神秘主義のカバラーがよく学ばれた

安息日の規定緩和：「照らす目的」だけでなく、「暖める目的」の火の使用も許可 (寒かったから)

ロシアにおける苦難：ユダヤ人との自己分断

- ・帝政ロシアの社会におけるユダヤ人迫害やユダヤ人への重税
⇒カライ派はそれを逃れるべく、「ユダヤ人」としてのアイデンティティをみずから放棄する
「非ユダヤ人」となることによって市民権を獲得
- ・セラヤ・シャプサルによるカライ派＝ハザール人説
自分たちはユダヤ人ではなく、ヘブライ語聖書を取り入れたテュルク系の民族であると主張
＊シャプサルは 19 世紀末の東洋学者 (オリエンタリスト)：当時の宗教学の問題ともいえる？

ハザール王国のユダヤ教改宗の伝聞

・ハザール王国

7 世紀にコーカサス地方（カスピ海付近）で成立した王国

・9 世紀（異説あり）にユダヤ教に改宗したことが語られる

マスウーディ『黄金の牧場』（10 世紀）などアラビア語年代記で言及

参照）杉田六一「ハザール（Khazars）のユダヤ王国」（『ユダヤ・イスラエル研究』第 3 号（1964 年））

・10 世紀にアル・アンダルスの後ウマイヤ朝のユダヤ人宰相ハスダイ・イブン・シャプルートと当時のハザール王ヨセフとのあいだで往復書簡が交わされた（らしい）

・三宗教のなかからユダヤ教を選んだという伝承

これらの 9－10 世紀の文献によれば、ハザール王ヨセフは、先祖の王がユダヤ教、キリスト教、イスラームの指導者たちとの討論を聞き、最終的にユダヤ教を選択して改宗したと記した。



イスラエルへの移住

・ロシアやエジプトのカライ派がイスラエルに移住

・しかし、ロシア系カライ派は、みずから「ユダヤ人」との関係性を断ったことで、ラビ・ユダヤ教の指導者との関係が悪化＝東欧時代に構築していた友好的な関係も崩れてしまう

＊ショアーの犠牲者となったラビ・ユダヤ教の信仰者たちからすると、「ユダヤ人」であることをやめてロシアやナチスから逃れたカライ派への反感が生じてしまいがちに

・エジプトのカライ派はラビ・ユダヤ教と統合的にユダヤ人社会を形成していた

→イスラーム主義の台頭とともに、エジプトのユダヤ人はほとんど国外へ

＊現在、エジプトにはほとんどユダヤ人は残っておらず、近い将来に消滅すると考えられている

・イスラエルではスファラディ系主席ラビはカライ派に協力的

（⇨アシュケナズ系はショアーの過去もあり、カライ派を敵視する者も少なくない）

ただ、世俗的な社会での生活を望んでカライ派の慣習を棄てる者や、学校で「浮いた」存在にならないように、ラビ・ユダヤ教の儀礼を取り入れる家庭もある

カライ派には「成人」の観念はなく、礼拝や戒律実践にふさわしい年齢も特に決まっていない

ラビ・ユダヤ教では「バル／バト・ミツヴァ」（男 13 歳、女 12 歳）という成人儀礼がある

⇒現代イスラエルのカライ派の子どもがラビ・ユダヤ教の成人儀礼をおこなうケースがみられる



エルサレム旧市街の「アナン・ベン・ダヴィド・シナゴグ」（左）

同じく 2016 年に設立された Karaite Heritage Center（下）¹¹



¹¹ <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e5/KaraiteSynnagogOldCity.jpg>; <https://www.facebook.com/Karaite-Heritage-Center-397418537315398/>（2022 年 5 月 20 日最終アクセス）

(おまけ) ラビ・ユダヤ教にとってのカライ派：あるジョーク

(Daniel J. Lasker, *Karaism: An Introduction to the Oldest Surviving Alternative Judaism*, London: The Littman Library of Jewish Civilization, 2022, p. 1 より)

あるとき、愚かな霊が入り込んだ王がこう命じた。ユダヤ人とカライ派は自分の前にやってきて、いったいどちらの宗教が先に世に現れたのかを証明すべく論争をせよ、と。すると、カライ派は彼らの最高の賢者を遣わした。他方、ユダヤ人は彼らの最低の賢者を遣わした。そのカライ派の代表は祝日用の祭服をまとっていた。他方、ユダヤ人の代表は平日用の服をまとっていた。

さて、ユダヤ人の代表は王宮に入ると、くつを脱いで脇に抱え、はだしで王に近づいていった。王は怒って彼に言った。「おまえは誰の前に立っているのかわかっているのか」。ユダヤ人の代表は答えた。「わがあるじである王よ、私は王のなかの王、あのほむべき聖なるお方（神）と同等にあなたを称えているのですよ。それは、『神は（モーセに）言われた。「こちらに近づいてはならない。履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地である』」（出エジプト記 3：5）と書かれているとおりです」。

王は喜び、そして訊ねた。「それでは、なぜおまえはくつを脇に抱えていたのかな」。ユダヤ人の代表は答えた。「わがあるじである王よ、私がこのようにしたのは、かつてわれわれが不幸を被ったからなのです。われわれはシナイ山に行き、トーラー（律法）を受け取ったとき、われわれは神を称えるために、そしてトーラーを称えるためにくつを脱ぎました。しかし、われわれが山から戻ってみると、くつが見当たらなかったのです。カライ派の人々がそれを盗んだのです」

すると、カライ派の代表が飛び上がり、ユダヤ人が語るのを遮った。「嘘つきめ。シナイ山での啓示のとき、カライ派はまだ存在していなかったのだぞ」。

ユダヤ人の代表は答えて言った。「わがあるじである王よ、ごらんください。彼は、ユダヤ人の宗教がカライ派の宗教よりも先に世に現れたことを自分で認めましたよ」

*ちなみに、「くつを脱ぐ」というモチーフは、カライ派が礼拝のときにくつを脱ぐ慣習を持っていることと関係している。ラビ・ユダヤ教の方にはそのような習慣はない。

⇒つまり、カライ派が聖書の教えに文字どおり忠実であることをコケにしているとも読める。

【現代】モロッコ：移動する聖者たち

モロッコのユダヤ教文化：聖者廟への巡礼

2000 年の長い歴史

- ・北アフリカがローマ帝国の支配下に入る以前から、ユダヤ人がパレスチナから移住
→7 世紀には多くのユダヤ人がイベリア半島（西ゴート王国）へ
- ・また、現地のベルベル人の一部がユダヤ教を受容：ユダヤ・ベルベル語の文化
- ・1033 年にフェズで大規模なユダヤ人迫害
12 世紀以降のムワッヒド朝による「イスラームへの改宗か移住か」の強制
- ・1492 年のユダヤ人スペイン追放後、イベリア半島から多くのユダヤ人が移住

20 世紀の状況

- ・1912 年にフランスの支配下に入り、ユダヤ人とムスリムが平等な社会体制へ移行
1956 年のモロッコ独立後もユダヤ人の市民権は認められたが、移住には制限も
- ・1967 年の第三次中東戦争（六日間戦争）後、国内のユダヤ人の状況が悪化し、中下層の多くがイスラエルへ移住する

モロッコ系ユダヤ人は現代でもふたつの社会層に分かれている

- ・中下層：ベルベル系ユダヤ人。南西部の都市やアトラス山地域に居住⇒主にイスラエルへ移住
- ・上層：ルーツがイベリア半島。北部の海岸都市に居住⇒主にフランスやスペイン

北アフリカのユダヤ教独自の文化

ミムナー（Mimouna）

- ・春の過ぎ越しの祭りの最終日（八日目）におこなわれる、北アフリカのユダヤ教独自の祝祭¹²
春の収穫祭としての性格
- 知人・友人宅を訪れ、指を牛乳と蜜に浸して「タルバハ・ワ・タスアド」
（嫁いで幸せに）というアラビア語の祝福を唱える
- ユダヤ人なシナゴーグでの礼拝を終えたとムスリムの格好をする。また、
子どもが大人の服装をしたり、男性が女性の服装をしたりする

イスラーム社会のなかで、この日だけは本来の社会秩序を意図的に逆転させることを通じて、ユダヤ人とムスリムの「日常的な絆を回復する」ことが目的と考えられる（臼杵）¹³



¹² 写真はハアレッツ紙（2016 年 4 月 29 日付、2022 年 4 月 23 日付）より。<https://www.haaretz.com/food/passover-s-best-kept-and-sweetest-secret-tradition-1.5377332>; <https://www.haaretz.com/israel-news/premium-a-brief-history-of-the-post-passover-mimouna-holiday-1.10748751>（いずれも 2022 年 5 月 21 日最終アクセス）

¹³ 臼杵陽『見えざるユダヤ人 イスラエルの〈東洋〉』平凡社、1998 年、22－32 頁

聖者たちの物語と聖地の創出

- ・モロッコのユダヤ人たちの宗教実践を特徴づけているのが「聖地巡礼」である

その伝統的な形式は「聖者廟巡礼」である：ローマ時代の歴史的な賢者から現代の賢者まで、彼らが「義人」（ツァディーク）とみなした人々の墓を訪れ、祝祭（ヒルラー）をおこなう慣習がある

イスラエル北部のツファト付近にあるラビ・シムオン・バル・ヨハイ（2世紀）の墓には年間35万人もの巡礼者が訪れる

イスラエル南部のキルヤト・ガトには、モロッコの著名なラビの一族であったピント家（18－19世紀）の墓が建造され、巡礼地となっている（モロッコ国内のユダヤ人墓地からの象徴的な移動）

- ・聖地は「聖者廟」にかぎらず、夢のお告げで指定された場所や奇跡体験のあった場所なども含む
「聖者」は公式に認定されるものではなく、人々のあいだで尊敬を集めることにより聖者となる
また、そのさいにさまざまな奇跡の物語が語られる

①ラビ・ダヴィド・ウ・モシェ

- ・モロッコの伝説的な中世のラビ。未詳の人物だがアトラス山地域のユダヤ人たちに広く崇敬される

1973年の啓示

- ・イスラエル北部のツファトに住んでいたモロッコ系移民アブラハム・ベン・ハイムに夢でお告げをする彼の小さなアパートの一室を自分の巡礼地とするよう指示
⇒ベン・ハイムが巡礼地を創ると、年間2万人の巡礼者が訪れ、祝祭を実践するようになる

聖者の「移住」

- ・ラビ・ダヴィド・ウ・モシェはモロッコ系移民のイスラエルでの移住先にたびたび「訪れる」
彼らと同じようにして聖者も「移住」し、夢のお告げによって各地に聖地が創出される

ラビ・ダヴィド・ウ・モシェの「お引越し」物語

ふたりのユダヤ人がクルダニ（ハイファ近郊）に住んでいた。プリムの祝祭の夜、彼らはすわってカード遊びをしていた。すると、夜に賢者（ラビ・ダヴィド・ウ・モシェ）が彼らのもとにやってきて言った。「なぜあなたは私のことを忘れてしまったのか」。彼らは彼に言った。「シディ（わがあるじ）よ、私たちはあなたを忘れてなどおりません。私たちがあなたを忘れたですって。どうしてそんなことができましょうか。私たちが隔てているのは海だけです」。すると、彼は彼らに言った。「いや、私は海の向こうにはいない。私はアシュケロン（イスラエル南部）の古い地区にいる。家の住所は何々番地のシュロモ・ワクニンのところだ」¹⁴

- ・こうした聖者の「移住」がはたす機能とは：

- ①イスラエル社会での新しい生活におけるモロッコ系移民にとっての伝統の回復
- ②移住先の新しい土地と自分たちの結びつきを創出すること

モロッコの聖者からイスラエルの聖者へ

- ・中東戦争の文脈でさまざまな奇跡譚が語られるようになる

- ・ラビ・ダヴィド・ウ・モシェの霊が、行方不明となった兵士を導き、無事に帰還させた
- ・第三次中東戦争中にアシュケロンのラビ・ダヴィド・ウ・モシェのシナゴグから光が放たれ、例年どおりこの場所で祝祭が続けられることを、巡礼者の女性に夢で告げた

⇒モロッコ系移民の伝統の守護者から、イスラエルの守護者のようなあり方へ変容といえる？

¹⁴ Eli Yassif, trans. J.S. Taitelbaum, *The Hebrew Folktale: History, Genre, Meaning*, Bloomington: Indiana University Press, 1999, p. 409.



②ババ・サリ（1889–1984）

- ・モロッコ出身の神秘家。本名はイスラエル・アブーハツィラー。
- ・ラビであり、また祈りによる奇跡を実践するカバラーの達人として、民衆のあいだで活動する
- ・アブーハツィラー家は代々、この奇跡の力を継承する者として、信者たちによる共同体が形成される
 - ＊東ヨーロッパのユダヤ教民衆運動であるハシディズム（Hasidism）と良く似た構造
- ・彼の死後、墓のあるネティヴォート（イスラエル南部）は聖者廟として多くの巡礼者を集める¹⁵

ババ・サリの癒しの物語

- ・ババ・サリの奇跡譚として最も多くを占めるのが病人を癒す物語である

ある癒しの物語（『ババ・サリ伝』（*Ha-Baba Sali*）より）

あるひとりの男が動揺してわれらのラビ（ババ・サリ）の待合室に入っていく、人々の目を引いた。彼は病気の親戚を連れてくるために道をあけてほしいと、そして苦しみ、混乱した患者が横たわる担架を運び入れるための部屋を用意してほしいと尋ねた。それからまもなくして、患者がわれらのラビの部屋に運び込まれてきた。すると、彼（患者）はそこで激しくむせび泣き始めた。すべての医者が必要と試みたが失敗していた。そしていま、彼に必要なことは、救いを求めてわれらのラビの前で懇願することであった。われらのラビは彼が語ることをすべて聞くと、途切れがちの声で、彼に完全かつ速やかな回復のための祝福を与えた。そして、自分がすわっていたところから彼に一瓶の水を渡し、毎晩寝る前にこの瓶から水を飲みなさいと告げた。

数週間後、その同じ患者が自分の二本の足で歩いて到着した。彼は眼を輝かせ、次のような奇跡の物語を家主に語った：

私がわれらのラビの部屋で担架に横たわっていたあの晩から数日後、私は夢を見た。夢のなかで私はわれらのラビを見た。彼はある人の写真を手に持っていた。そして、われらのラビは夢のなかで私の方を振り返り、写真を見せて言った。「この者は医者である。彼の名前はラファエル・カラッソ医師。テルアビブの何々通りに住んでいる。彼のところに行って、あなたの病気を治してもらうよう尋ねなさい」——

さらにその患者は続けた：

私はその奇妙な夢を覚えていた。そして、テルアビブに住んでいる娘にすぐに電話をかけ、われらのラビが私に語った何々通りにその名前の医者がないかどうか探してほしいと尋ねた。しかし、私の娘はまったく考える必要はなかった。彼女はそこで、自分がその医者のことを知っていると言ったのだ。「どこで彼のことを知ったの？」と彼女は驚いて私に訊ねた。私はわれらのラビが見せてくれた写真のとおり、彼の容姿を娘に示した。娘の驚きは七倍になり、一度も会ったことのない人間の容姿を自分に示すことがどうしてできたのかと理解できなかった。彼女はこの驚くべき事柄を理解した後、その医者の家へと急ぎ、私のための診療の予約を取った。〔……〕その医者は私を検査し、これまでの医師たちが私に与えたすべての経過予測をただちに棄て去った。彼によれば、私はその病にはもはや罹っておらず、数日間で完全に回復するとのことであった。彼は薬局で買いなさいと言って、私のためにいくつかの薬の処方箋を書いた——

その回復した患者は自分の話を家主に語り終えると、われらのラビの部屋に入って、自分の物語を語り、彼に感謝をしたいと尋ねた。そして、彼はわれらのラビの従者とともに部屋に入った。彼の顔を見ると、われらのラビの聖なる顔が輝き、唇には微笑みを浮かべて、彼が一言を言うのを聞く前にこう結んでみせた。「私は夢のなかで彼と話すのだ」と。¹⁶

¹⁵ https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e8/BabaSaliTomb_women.jpg（2022年5月21日最終アクセス）

¹⁶ Yassif, *op. cit.*, pp. 419–420.

- ・ ババ・サリによる癒しは、医師による治療との協働関係にある
「一瓶の水」による癒しをカラッソ医師が確認し、最終的にその治療を完成させる
また、患者と夢のなかで対話をし、カラッソ医師のもとへ導く

穏健な神秘家としての立ち位置

・ 科学的な医療と対立しない癒し

＊他のエピソードでは、ババ・サリが病院で祝福と癒しの実践をおこない、その医師たちが見学に来るという話もある

・ 伝統的なタルムード学習を否定しない神秘家

イスラエルのスファラディ系主席ラビのオヴァディヤ・ヨセフは、伝統的なタルムード学習を主張
東欧のリトアニアで形成された厳格なタルムード学習の様式を積極的に導入する

⇒ババ・サリの活動はこうした伝統的なユダヤ教の学習制度と対極をなす

学習よりも祈りによって神的な力を体験し、身体の癒しを含む現世での利益を人々にもたらす

東欧のアシュケナズ系とイスラエルのスファラディ系における違い

- ・ 東欧では民衆のあいだで奇跡を起こす聖人への信仰伝統（ハシディズム）が、伝統的なタルムード学習を掲げるリトアニア系正統派と鋭く対立した

- ・ イスラエルのスファラディ系社会ではそのような対立は生じなかった

⇒ その最大の理由はババ・サリの包括的な姿勢にあると言われる

- ・ 彼はスファラディ系が東欧の伝統的な学習を導入することに反対しなかった
- ・ シオニズム運動にも反対せず、世俗社会にモロッコのユダヤ教文化を開いていく姿勢を維持した

③ヤイシュの聖地¹⁷

ヤイシュの家の裏庭に現れた「楽園への門」

- ・ 1979 年、ベト・シェアン（イスラエル北部）に住むモロッコ系ユダヤ人のヤイシュが夢を見た
ヤイシュは夢に現れた預言者エリヤのお告げにしたがって自宅の裏庭を掘り、「楽園への門」を見つけたと宣言した⇒80 年代以降、巡礼者が多く訪れ、エリヤを祝う祝祭が毎年開催された
- ・ ヤイシュという個人が体験した夢が、近隣のモロッコ系住民に共有され、私的な聖地が創出される
「楽園への門」の巡礼者は、その巡礼によってさまざまな癒しを体験する

イスラエル移住前のモロッコの故郷に対するノスタルジーとしての聖地創出

- ・ ヤイシュが生まれたモロッコ南部のウラド・マンスール村には、古代にパレスチナからモロッコに移住してきたとされる賢者たちの墓（イル・クハニヤ）があり、聖者廟巡礼が慣習となっていた
- ・ ヤイシュは特に信仰熱心ではなかったが、12 歳のときにイスラエルに移住して以降、厳しい生活状況に直面し、ユダヤ教の学習に励むようになる。
- ・ また、キブツで労働しているときに、いくつかの考古学的な発掘作業にも参加した。
- ・ 礼拝に参加しても心理的不安に襲われ、自宅に自分用の礼拝所をつくるほどであった
⇒夢のお告げの体験と「楽園への門」の「発見」は、故郷の聖者廟巡礼を創出することであった

¹⁷ Yoram Bilu, “Dreams in Paradise: The Rise and Falls of a New Holy Site in Beit She’an, Israel,” in *Jewish Studies at the Crossroads of Anthropology and History* (R.S. Boustani, O. Kosansky, and M. Rastow eds., Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2011), pp. 80–101.

引き継がれ、消えてゆく小さな聖地

- ・ヤイシュが「発見」した聖地は、ラビ・ダヴィド・ウ・モシェやババ・サリの事例とは異なり、ベト・シェアンベト・シェアンの小さなコミュニティに限定の巡礼地であった
- ・彼の夢に出てくる「楽園への門」や聖者が別の夢見者に引き継がれるという現象がみられる
- この「引き継ぎ」により、ヤイシュの家は不妊に悩む女性たちの巡礼地として意味づけられてゆく

夢見者ラヘルラヘルの体験

私は夢を見た。そのなかで、私はヤイシュの家に行き、門の前に立っていた。私がドアをノックすると、帽子をかぶった小さな老人が出てきた。私が「ヤイシュはどこですか？」と訊ねると、彼は「ヤイシュはここにはいない。私が彼に代わって、この家の世話をしているのだ。あなたは何を望むのか」と言う。

「ここに来たのは気分が優れないからです。私は妊娠にかんしていくつかの問題を抱えています。この場所この場所でつくられたアラックアラック（蒸留酒）を私にください」と私は言った。すると彼は「あなたはミクヴェミクヴェ（ユダヤ教の儀礼用の浸水施設）に入ってきたか」と尋ねた。私は翌日に（月経中の女性が身を清めるために）ミクヴェに入る予定であり、「いいえ、明日行きます」と言った。すると彼は「それはいけない。私は賛成しない。いかなる者もミクヴェに入ることなしに、この場所に入ってはならない」と言った。私は「でもヤイシュは、私がいつ訊いても、私が清浄であるならミクヴェに入る必要はないと言っています」と彼に言った。しかし彼は手を振りながら、「いいえ、あなたはここに入ることを認められていない。そして、ヤイシュも知るべきだ。きょうからは、女性はミクヴェに入ることなしに、この場所に入ってはならない」と言った。

「わかりました」と私は言った。彼は私を入れてくれなかった。彼は私と一緒にドアのところに立っていた。すると彼が言った。「ここで待っていなさい。何か持ってこよう」。彼は私に一杯のアラックとオレンジを与えた。そして私は家に帰った。

すると、家には母がいた。私は14歳のときに母を亡くしていた。私が見たのは、家で私を待っている母であった。彼女は言った。「どこにいたの？ どうしていなくなっちゃったの？ 私はあなたをずっと待っていたのよ」。私は彼女に言った。「お母さん、私たちにはある場所があるのよ。なんていうか、この家ではすべての望みがかなうのよ」。すると彼女は「いらっしゃい。私をそこへ、その場所へ連れて行って」と言った。

私はそこへ彼女を連れていった。そして私は見たのだ。彼女が赤ちゃんを抱きかかえ、ミルクを飲ませて立っているのを。

- ・モロッコ系ユダヤ人の社会では、**個人の体験にもとづく私的な聖地が次々に創出される**
ただ、彼らのラビたちはこうした私的な聖地を正当なものとしては認めないことが多い
また、ヤイシュ自身も2000年代初めにみずから「楽園への門」を手放し、引っ越してしまう
- ・**日常的な生活の身近なところに聖人たちがおり**、夢のお告げという仕方で聖地が創出される
しかしその聖地の多くは（まさに夢がそうであるように）長続きせず、消えてゆく

////////////////////////////////////

小括

- ・中東のユダヤ教はきわめて多様である。その多様性とは、ユダヤ教の主流をなすラビ・ユダヤ教の内部における多様性だけでなく、ラビ・ユダヤ教とは異なるいくつかのユダヤ教の伝統をも含む
 - ・イスラエルの世俗的な社会やアシュケナズィ中心の階層性、イスラエルにおける「スファラディ系」の画一化によって、イスラエルではこれらの中東のユダヤ教の多様な文化が見えにくくなる。逆に言えば、これらの伝統文化を実践することにより、イスラエル社会に対する自分たちのアイデンティティのアピールがおこなわれている。社会的マイノリティの立場からの異議申し立てとしての役割がある。
 - ・中東のユダヤ人は、特に 20 世紀半ば以降、政治的・社会的な困難さ、経済的な貧しさなどの理由でイスラエル（やその他の国々）へ移住してきた。彼らの宗教的実践は、新たな社会や生活環境のなかで直面するさまざまな問題を反映することがある。また、移住後も故郷との結びつきを維持したり、同じ地域出身の移民たちの結びつきを維持したりする役割も重要である。
- ////////////////////////////////////

参考文献

- Encyclopaedia Judaica, Second Edition*, F. Slonik (editor in chief), New York: Macmillan Library Reference, 2006
- Jewish Communities of the World*, Jerusalem: Institute of the World Jewish Congress, 1996
- Bilu, Yoram, 1998, “The Role of Charismatic Dreams in the Creation of Sacred Sites in Present-Day Israel,” in *Sacred Space: Shrine, City, Land* (B.Z. Kedar and R.J.Z. Werblowsky eds., New York: New York University Press, 1998), pp. 295–315.
- Bilu, Yoram, 2011, “Dreams in Paradise: The Rise and Falls of a New Holy Site in Beit She’an, Israel,” in *Jewish Studies at the Crossroads of Anthropology and History* (R.S. Boustán, O. Kosansky, and M. Rastow eds., Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2011), pp. 80–101.
- Brown, Benjamin, 2017, *The Haredim: A Guide to their Beliefs and Sectors*, Tel Aviv: Am Oved. [Hebrew]
- Lasker, Daniel J., 2019, “Karaites and Jerusalem: From Anan ben David to the Karaite Heritage Center in the Old City,” in *Next Year in Jerusalem: Exile and Return in Jewish History* (L.J. Greenspoon ed., West Lafayette: Purdue University Press, 2019), pp. 99–110.
- Lasker, Daniel J., 2022, *Karaism: An Introduction to the Oldest Surviving Alternative Judaism*, London: The Littman Library of Jewish Civilizations.
- Tapper, Aaron J.H., 2016 *Judaisms: A Twenty-First-Century Introduction to Jews and Jewish Identities*, California: University of California Press.
- Tsur Yaaron, 2017, “Colonial and Post-Colonial Jewries: *The Middle East and North Africa*,” in *The Cambridge History of Judaism, Volume Eight: The Modern World, 1815–2000* (M.B. Hart and T. Michels eds., Cambridge: Cambridge University Press, 2017), pp. 251–256.
- Yassif, Eli, 1999, trans. J.S. Taitelbaum, *The Hebrew Folktale: History, Genre, Meaning*, Bloomington: Indiana University Press.
- 市川裕、2009、『ユダヤ教の歴史』山川出版社
- 白杵陽、1998、『見えざるユダヤ人—イスラエルの〈東洋〉—』平凡社
- 白杵陽、2009、『イスラエル』岩波新書
- 白杵陽、2019、『「ユダヤ」の世界史——神教の誕生から民族国家の建設まで——』作品社
- ゲルショム・ショーレム（山下肇ほか訳）、1985、『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局
- R・ミレイアニュ、A・デュグラン（小梁吉章訳）、2007、『約束の旅路』集英社文庫
- 山本伸一、2015、『総説カバラー—ユダヤ神秘主義の真相と歴史—』原書房